

## 川満信一氏を悼む

高良勉

間に合わなかつた。2ヵ月ぐらゐ前から、電話をし

ても川満信一は取らなかつた。気になり、友人の仲里効に様子を聞くと「寝たきりになつてゐるらしい」と

言つ。来週にはお見舞いに行こうとしていた矢先、訃

合ひたかつた。

川満信一は、文字通り戦後沖縄の思想家、詩人、ジャーナリストの巨星であつた。私は、1978年から

今まで46年間ご指導、ご親交いただいた。まず、78年に『川満信一詩集』を恵

その後、川満と私たちは同人誌「ジョンガネー」を発刊したり、詩誌「KAN A」に寄稿してもらつたり

した。そして川満は、個人誌「カオスの貌」を2007年に創刊し18年の12号まで出版し続けた。

川満信一は、詩人・批評家として現役のまま倒れ逝去了した。沖縄では、あまり知られてなくて残念だが、

沖縄戦後思想の重要な鉱脈から学び、触発され、私は本当に幸運だったと思う。

川満信一は、詩人・批評家として現役のまま倒れ逝去了した。沖縄では、あまり知られてなくて残念だが、日本の詩誌で最高峰と評価される月刊誌『現代詩手帖』で23年の9月号から現在まで連載詩「言葉破れて國興るか」を9回にわたつて執筆している。「ぼくは秘かに情を込めて／洗骨の儀式を行う」(連載詩・7

報が入つてきた。残念である。享年92歳。もつと語り

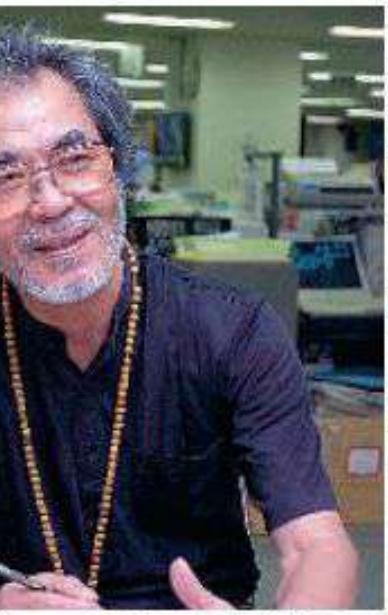
贈していただき、読んで身震いするするぐらいの衝撃

した。そして川満は、個人誌「カオスの貌」を2007年に創刊し18年の12号まで出版し続けた。

川満に関しては、書く紙幅があまりない。何よりも、「沖縄タイムス」紙の芸能部や『新沖縄文学』の編集長として、私に多くの原稿執筆を依頼し鍛えてくれ

た。新川明や上間常道たちと一緒に、沖縄の思想の「根(ニゴトウ)」を探求して素顔文化と思想の「根(ニゴトウ)」を探求して素顔する事の重要性を教えられ

ます。ううどーと



インタビューに答える川満信一氏=2007年5月24日午後、那覇市天久の琉球新報本社

# 見事な詩と思想の一生

と感動を受けた。そして翌79年、私の第1詩集『夢の起源』に推薦・跋文の「詩の当面する困難性」を書いた。

そして、私たちは共に『琉球共和社会憲法の潜勢力』を出版した。私の思想の詩と詩論から「詩には思想が盛り込めるし、共生の思想を表象すべきだ」と教わつた。

の思想は常識となるまで、拡がつてゐる。

驚くべき事に、92歳まで現役でバリバリで詩や評論の原稿を書き公表していたのである。この想こそ、真似できるか、恐れ多く心もとない。川満は、23年7月の未来社雑誌「未来」に「近代化と同化を考え」という注目すべき長い評論を発表している。

たこと。これは、私もあやかりたいものだ。そして、

かりたいものだ。そして、驚くべき事に、92歳まで現役でバリバリで詩や評論の原稿を書き公表していたのである。この想こそ、真似できるか、恐れ多く心もとない。川満は、23年7月の未来社雑誌「未来」に「近代化と同化を考え」という注目すべき長い評論を発表している。

川満信一は、詩人・批評家として現役のまま倒れ逝去了した。沖縄では、あまり知られてなくて残念だが、日本の詩誌で最高峰と評価される月刊誌『現代詩手帖』で23年の9月号から現在まで連載詩「言葉破れて國興るか」を9回にわたつて執筆している。「ぼくは秘かに情を込めて／洗骨の儀式を行う」(連載詩・7)

お、みごとな詩と思想の一 生よ。どうぞ、安らかにお眠り下さい。ううどーと

私は、川満信一の生き様

に憧れ、恐れてきた。ま

う。合掌。(敬称略)(詩

授)

す、友人たちに恵まれ、酒

を楽しみ92歳まで長命でき

た。続いて、庄椿だったの

う。合掌。(敬称略)(詩

人・批評家・沖大客員教

授)